

2011年1月31日  
株式会社パスコ

(報道資料)

## 合成開口レーダー衛星「TerraSAR-X」で新燃岳火口のモニタリングを開始 2011年1月31日午前6時27分撮影

株式会社パスコ(本社:東京都目黒区、代表取締役社長:杉本陽一、資本金:87億円、セコムグループ、東証1部)は、2011年1月31日午前6時27分(日本時間)、宮崎・鹿児島県境にある霧島山系・新燃岳の火口の様子を合成開口レーダー衛星「TerraSAR-X」で撮影し、同火山のモニタリングを開始しました。

噴火前(2009年03月15日撮影)の新燃岳火口内には火口湖の存在が確認できますが、今回の撮影では水面を示す黒い領域は確認されていません。火口内では直径約500mのお椀を伏せたような領域が確認でき、これが溶岩ドームと推定できます。また溶岩ドーム上には南北に延びる白と黒の帯状の領域が確認でき、比較的大きな亀裂(長さ約200m)が発生しているものと思われる。



霧島山系・新燃岳は2011年1月19日に小規模噴火を起こし、26日に再び噴火しました。気象庁によると、1月26日18時50分頃には灰白色の噴煙が火口縁上2,000mまで上昇しました。また、28日に直径数10m程度であった溶岩ドームが2日後の30日には直径500mに達するほどになり

火砕流の発生が懸念されています。このような火山活動の活発化に伴い26日18時には噴火警戒レベルが3に引き上げられました。

■合成開口レーダー衛星「TerraSAR-X(テラサーエックス)」

「TerraSAR-X」は、衛星本体からマイクロ波を照射し、地表面あるいは地上の対象物から反射・散乱されて戻ってくるエコーを受信する能動型センサを搭載しており、昼夜間を問わず、また、雲や噴煙の影響を受けず地表面を撮影できるため、災害発生時に大きな威力を発揮します。

「TerraSAR-X」は、ドイツ政府機関のドイツ航空宇宙センター(DLR)とヨーロッパの大手航空宇宙企業EADS社傘下のEADS Astrium社との官民連携事業によって開発され運用されるドイツの衛星で、その商業利用をEADS Astrium社が設立したInfoterra社が担当しています。

パスコは、このInfoterra社とパートナー契約を結び、日本国内への独占販売権と世界市場への販売権を保有し、「TerraSAR-X」の撮影データとデータから生成される新たなサービスを提供しています。

■今後について

今後も、噴火活動のモニタリングを継続して行く予定です。

経過は、パスコホームページの「災害緊急撮影」に随時掲載して行きます。

[http://www.pasco.co.jp/disaster\\_info/](http://www.pasco.co.jp/disaster_info/)

■お問合せ先

(報道関係)

株式会社パスコ 基幹業務部 広報担当:03-6412-2800

(お客さまから)

株式会社パスコ カスタマーセンター:0120-494-800